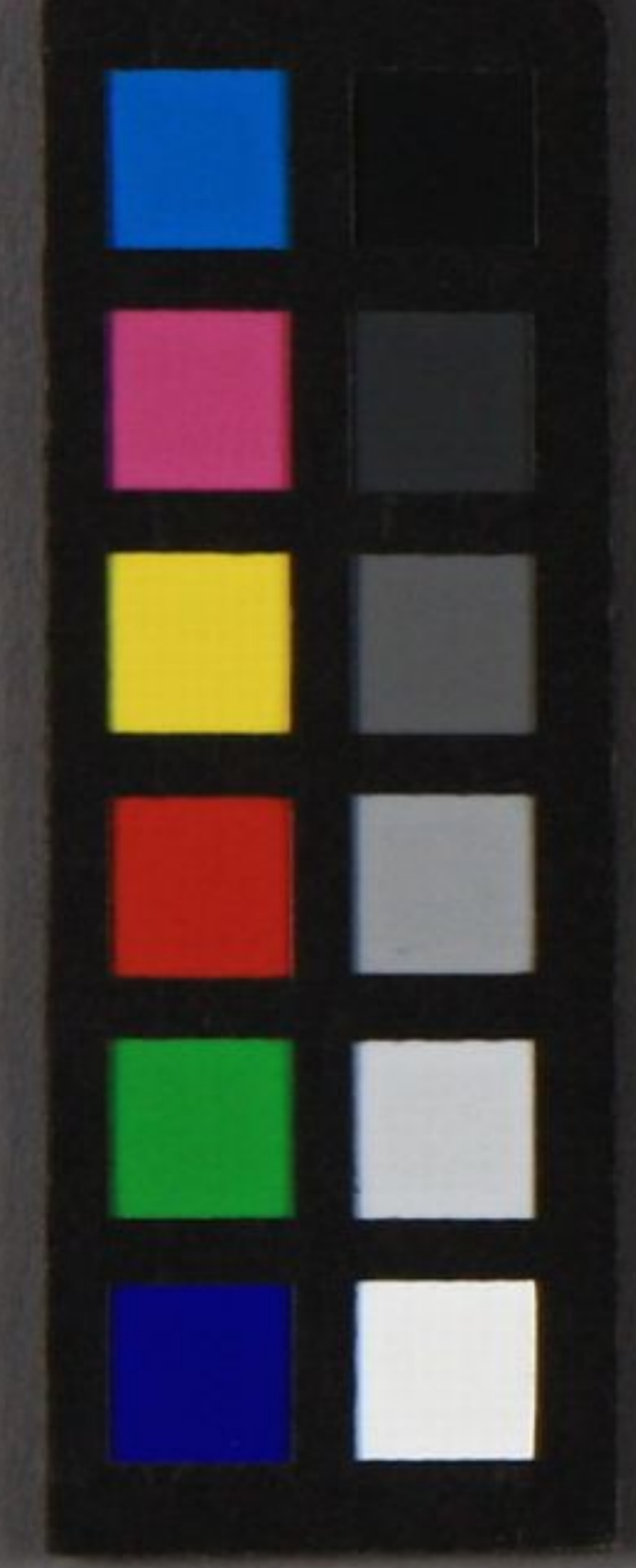


詩集

野良着

加藤吉治著

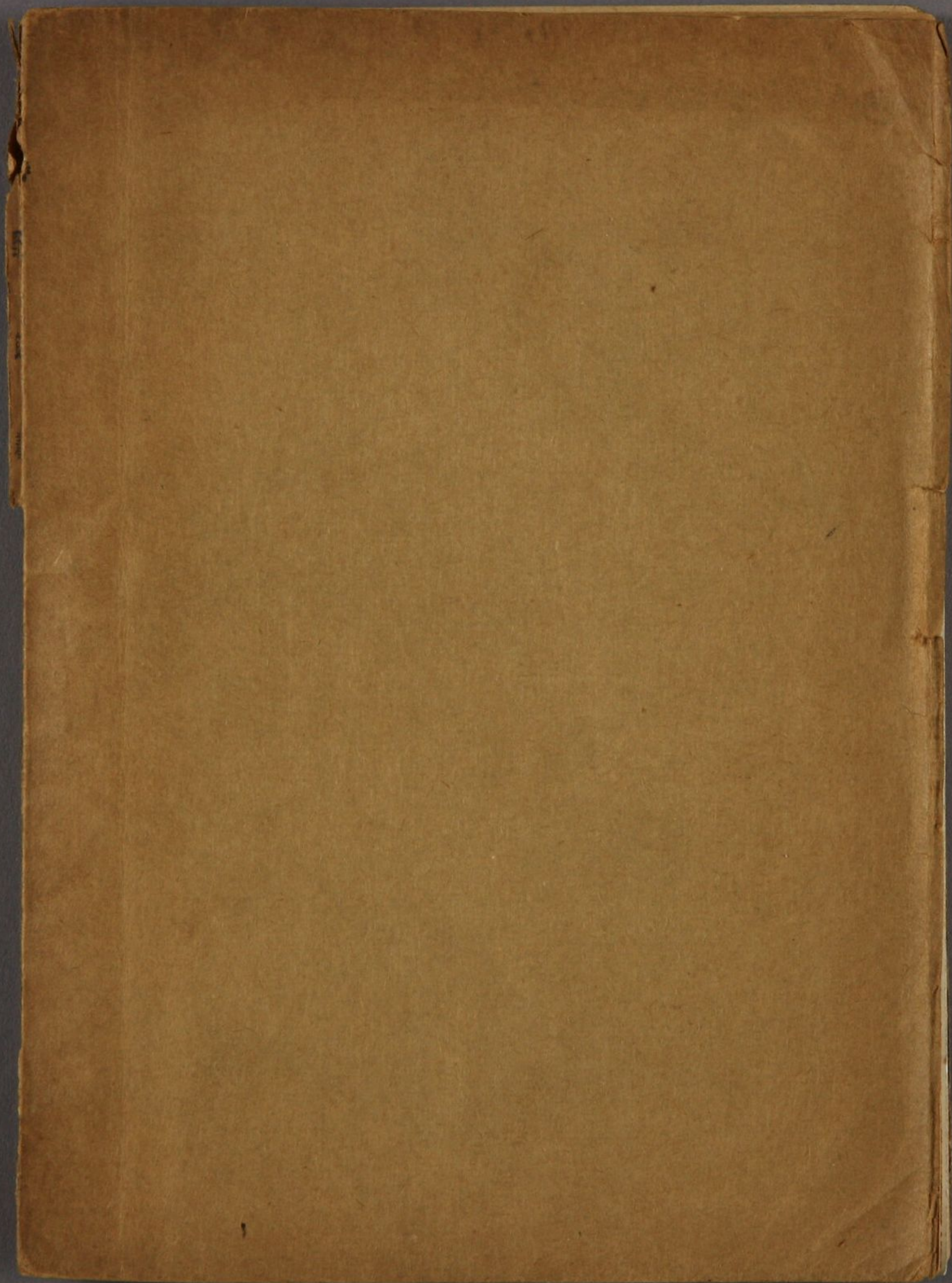




野良着

加藤吉治著

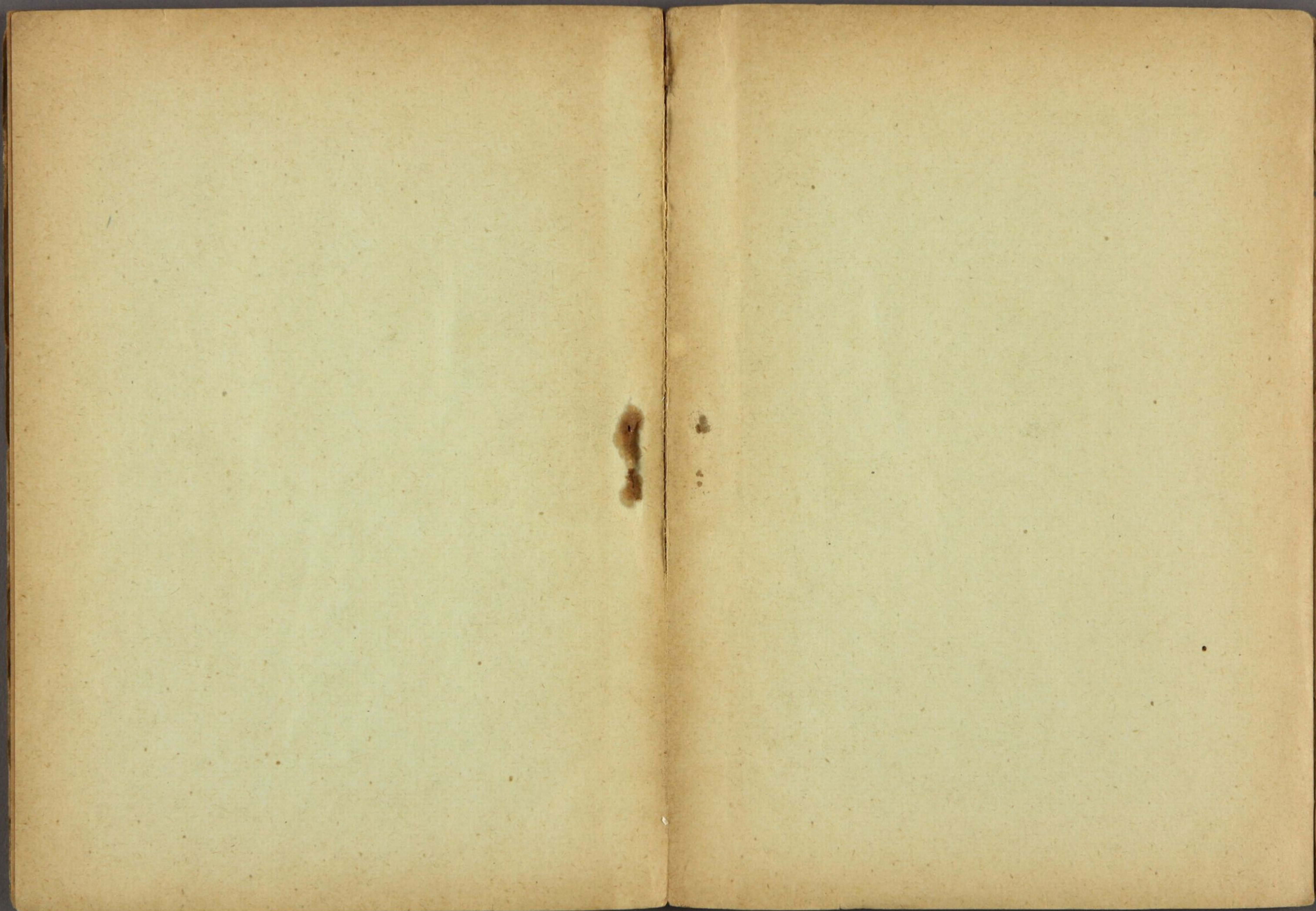














加藤吉治詩集

野良着

無肥料地帯社



熊野堂詩集

# 野良著

熊野堂詩集

## 自序

土才み此の馬鈴薯著のこゝき作品をのせて粗末な「野良著」を世におくる。  
 まづレリが故に負レシと書き、百姓生活の糧に乏はらば詩を著すは未だ  
 自らの作品が秀れてゐるとは思わぬ、村人同志が話し合ふごとく野良で銅羅  
 音を張り上げて呼びあふことく書きて来たのにすぎない。  
 私は詩で（形式や音律の問題によつて決定される詩）あるのは自分で不信を  
 抱いてゐるが、詩人の前に己れの詩想の浅薄、詩技の拙劣を感じて怖れ  
 てはゐない。少くも多ク、の反し身を握り合ふことが出来たり、自分たちはより固  
 く握手を深くすることになり出来たりと希す止まない。

この詩集の出版のために、じりく焦げるやうな炎天の下で一日の労働の疲  
 勞に、重り合つて来る眼をおしあけて寫字をやらされた精密の厚い友情と、  
 無肥料地帯の同人諸氏の復讐を首を俯れて感謝する。こうしたよ、友  
 に恵まれ友達の力を借りて歩いて来た私は、この感謝の心を以てこの粗末な  
 「野良著」をすての及におくる。

昭和八年 眞夏の頃

著者



目次

自序

埃の中から生れる詩

牽かれて行った仔馬

開墾地

夕焼

秋晴

埃の中から生れる詩

炭を賣る女

村の道に

寂林(一)

寂林(二)

丘の西瓜

丘の西瓜

蝗捕る少女

紅い月

山の乙女

山の女たち

おきよ

おとしり

千代子

おつや

狐

開墾地

月夜

山村哀歌

その一

その二

その三

二四六七八九

一〇一

二

三



埃の中から生れる詩

埃の中から生れる詩  
吹雪の夜  
吹雪  
その一  
その二  
その三  
その四  
その五  
その六  
その七  
その八  
その九  
その十  
その十一  
その十二  
その十三  
その十四  
その十五  
その十六  
その十七  
その十八  
その十九  
その二十  
その二十一  
その二十二  
その二十三  
その二十四  
その二十五  
その二十六  
その二十七  
その二十八  
その二十九  
その三十  
その三十一  
その三十二  
その三十三  
その三十四  
その三十五  
その三十六  
その三十七  
その三十八  
その三十九  
その四十  
その四十一  
その四十二  
その四十三  
その四十四  
その四十五  
その四十六  
その四十七  
その四十八  
その四十九  
その五十

五。

六四四六



高年かれて行つた仔馬

仔馬よ

しとれと微温湯のやうな雨降る日  
父に高年かれて行つたお前が  
小倉温泉町に閉られた馬市で  
あの可愛らしい瞳を見張つたウウ

仔馬よ

一昨年の十月頃

白つかりの親馬と別れて  
見も知りぬ俺の家に来た頃は  
太古の水のやうに澄み切つた瞳に  
あの雄大な十勝の草原で  
同輩と思ひ切り馳せ廻つた夢があつたウウには

四肢は柏の木やうに堅くなり  
たてがみは毛糸よりも美しくなつたお前が  
俺の足音がする度に元氣よく嘶いて  
馬先棒をがた／＼鳴らしておたの座が

仔馬よ

お前は去つた

からんとしたさかしの厩の前で  
再びかへる釣もなのお前の生涯を  
今日も俺はひとり思ひつゝある



開羅地

雑木林を切り倒して  
畑にももやしを植えた  
少しは生活が楽に存んべと考へると  
この寒地にもじつとして居る存んべ

俺と婦人

汗みじろでん髪こして  
一日のついでわづか二坪の三坪  
根株を掘りおこすのにあふらをしぼり取れて  
ウヤへて見れば割合わづかい仕事存んべ

雑木林は霜で真白だ  
指先が切りぬるよに冷めた  
お、婦人よ寄って来いよ  
焚火でもして温まるべえ  
小見はぼろ肌子にくるまつて  
箕の上ですやくとねむておる  
干びた唇でわい、んん  
枯葉はこんなにあつたよ



夕焼

俺と嬢が  
昏から汗みどろになつて種<sup>こ</sup>米を  
町の地主へもつておつたら  
人のソのおのみさんが  
香の高のお茶を御馳走してかり  
大きな鹽鮭を一匹くわてよこした  
俺は護符でも戴いたように  
紺ふろしきに大切にフムを  
頭をペック／＼下げましたよ

あぶらけ  
脂肪命がなくて  
肌の手からびた内の嬢が  
松皮のやうな荒れた手で  
ガツ／＼泣きじゃくる  
小鬼の頭をけりしぼれながらも  
夕飯の仕度をして俺をまつておると思へば  
しづかの西窓で焼える  
眞紅の夕焼のやうに  
俺の胸は熱くなつてくるのだ



秋晴

青空が遠きとほり

一つよりこびが空けりころがつてくるやうに  
秋の大陽をうけたうめもと木に

一しきり雀が鳴き去った

秋晴ほどこまやもうれしい

稲をはこぶ馬の鈴の音はひびく

俺たちもせつせと田圃から稲をはこぶうな

田圃から家までは遠く

脊が負った稲がゆさゆさくすろので

肩も脊も痛くなつてしまひ

俺たち付網屋の雨おちでいこむ時に

うすやの仔馬は

まどさをほしがつて馬先棒をかたく鳴らし

祖母におんぶされてた小児も

お腹を空かして母の乳房を恋しがつて泣いておた

俺はおし切りで葦を切つて仔馬にやつた

そしておしれさうに食ふのをしばらく見ておた

妻も汗でよごれた胸をあけて

小児に乳房を含ませておる

母が皮をむいてくねる林檎は

沙漠の中の水のやうに美味しいのだ

おう もう一度運ぼうな

明日はお天気が変わるかも知れない

牧場の羊のやうに断れぬが

西空一ぼくに擴つて来たよ



埃の中から生れる詩

がらんがらんがらんがらんがらんがらんがらんがらん  
がらんがらんがらんがらんがらんがらんがらんがらん  
今宵も隣からその隣から  
稲を扱く機械の音がひびいて来る

鈍いランプの光り

歯をくわしぼって踏む機械は

うなりをたて、魔のやうにまわりつづける  
あ、ばらばらばらばらと

はぢけ糶ぶもみの粒 粒

百姓同志の血なまぐさい夢がはらみ

あかじみたるりもとから流れ出る汗が実ったもの

妻と俺達はもう

埃が胸にくひ入ることも考へるまい

がらんがらんがらんがらんがらんがらんがらんがらん

がらんがらんがらんがらんがらんがらんがらんがらん

隣からもその隣からも  
農民の秋の革命歌がひびいてくる



炭を賣りに来る女

温泉町へ

炭を賣りに来る若い女  
油気の付いた黒髪に  
小さな炭灰がたまるとも  
続くひまさえなほ忙し、生草米  
日にゆけた襟足の汗は  
あなたの夫への美しいおくりもの  
それであなたの夫は  
せつこん せつこん……  
木も挽き割りして  
川唄で炭焼くことが出来るのだ

温泉町のやうな女が  
町に湧く縁起音のりのかれて  
及手にさげた合の酒と  
木の葉で包んだ小魚と  
原始の赤紙のやうに肥はるる月  
甚だ盛やかこんだ山小屋へかへるのだ  
温泉町のやうな女が  
町に湧く縁起音のりのかれて  
及手にさげた合の酒と  
木の葉で包んだ小魚と  
原始の赤紙のやうに肥はるる月  
甚だ盛やかこんだ山小屋へかへるのだ



村の道に

雨寒冷たき村の道に

これはお記の心此もカトナリ

悲しくも見ずてらぬレオった公徳箱

蓋はこわれて泥にまみれ

卒塔婆のやうに朽ち果てた竹箱は

誰が扱げ捨て、行ったか

南国の情緒をばるぼる運んできた密柑の皮と

赤いパーパーのはがれた北洋の鮭罐を

埋めたさびしい墓場だ

食物もさかすやせこけに野良犬の外に

村の人達からも見捨てられしオったお前

夜行く色街に通ず若衆の身振る身振を聞き

あひがみに来る色の黒いせが足音を急げせて来ても

あ、純情の泪にむせぶより外に存いお前存のだ

つつオしくも村の道にすわー

甚北果て、行く農村を見詰めて

今は葎屋根と共に

朽ちて行くより外にすべないのかー



寂林 (一)

病みついた太陽は  
やんそくでもするやうな光線で  
標の木肌は反映(ひび)る  
木根は魔獣(まじゅう)のやうにほえて枝を震わす  
窸々とした寂林の中で  
妻がさ集める枯葉の音は  
この妻かものと思はれぬ程悪感(あくかん)は胸に響く  
萎びてしまった腕  
枯れ果てた二り足  
苦ししい貧乏農奴(いんぷくぬ)の生活をみくくと語り  
俺も妻も自然(しぜん)の抱擁(だくよう)に呼吸(こそ)して  
深い夢想(むさう)に疲れてくるのだ

寂林 (二)

あゝ昔、赤い血潮(ちくしゅう)が吼えたので  
切られて死んで行った俺たちの仲間  
建旗(けんしほ)、竹鎗(たけやり)、鋏(はさみ)、鎌(かま)、鋤(こ)等々々  
暴政(ばうせい)に堪えかねた過去の俺達の仲間(わがら)は  
銅四維(どうしほ)声を張り上げこの土地に立ったのだ  
しかし弱いものは哀しい  
片肌ぬいだ人々の上には  
草木の木が植えつけられ  
開けはなされた寂林(しやくりん)さえ  
枯葉(こは)より外は残さぬ



百姓の無骨を以て

編むが料を小書と

虫具にふる

その中より三々夏前除



丘  
の  
西  
瓜



丘の西瓜

結土の丘に

アソテ下見にやうなものが止った

カラン カラン

石細鐘が鳴るたんび

矢作節の笑顔と

まるくくと太った西瓜

芒の庭で圓んを番小屋で

禿頭の蠅を五月蠅がって

矢作節は晝寝する間に

横着者の鳥が

コッソリ ヌッソリ

西瓜の頭をなぐっておる

静かな夕暮

蒼い弦月は

西瓜の花に光るとま

細い豆の下の下で

矢作節は

都の野良息子をも思った



蝗捕る少女

少女さん  
そこのを捕つちやいけねえや  
ネヤンと断つてあるべえ

「ここのいなごとるべからず」

伊平おやぢの覚來かい

金釘流が

真正面に陽をうけてゐる

あの少女はネッ

都のう帰つたお婆さんのみたひ

桃色のバラッルがほしのだべ

(輝をゆで殺して一升ぐらつて賣るりだ)

紅い月

昨夜のお月さまは

あか、つた

色の黒い女が

杉垣のかげで待つてゐた



山の乙女

乙女の襟足に  
白百合の花が咲いておもしろ

それでその乙女は  
村の若者から騒がれるんです

山の女たち

(おきよ)

おきよ、おきよ、おきよの家へ  
女中に行つてから少しおきよのぬけりして来た  
途中村人と出遇つても  
けつして頭を下す存かつた  
ケエツと舌打ちさ、水でも  
ツンとすすしんんでおた  
村は秋の収穫で忙しかつた  
大根は毎日その足を太めた  
おきよの腹はかくされ程大きくなつた



山の女たち

（おとり）

おとりは色が少し黒かったが  
愛嬌があつた

毎夜彼女の障子に  
穴があつた

山の女たち

（千代子）

― 処女つて 白白合の如く  
清く気高くあらねばならぬのよ―  
バイブルはたか身にしてい  
つとも気どつてゐる千代子

お盆のおどりがあつた夜  
自動車の助手の中山と  
切桑畑にのくれたと  
千七が俺にはなしたよ



山の女たち

(あつや)

お先祖さまがのこしてくれた  
家屋敷をとりぬるよりまじだつて  
おつやは街々賣られて行った

あのみたくない女<sup>あま</sup>つ子を  
買ふものおきもいふべか  
村のみんなが嘲笑つておた

よくあのみたくなれがって  
村のみんなが魂消る程  
おつやは美しくなつて帰た  
でもお白粉をこつてり塗つた首が細い  
肩でせわしく喘いでおた

狐

冷える夜ほど

狐はお山で鳴いてたもんだ  
千てたすみ大根行と  
よく食ひに来たもんだ

狐が化けて人をばさすといふこと  
みんなほんとはしてあだが  
いふは誰もほんとはしなく存つた  
そしてまた狐も来なく存つてしやつた



開墾地



月夜

稲田の上でお月さまがさびしくわらつておる  
おや鳥からはぐれた子ぐいなほ  
くくくくくくと

鳴き呼んでおるよ

土堤にゆつたりと重れた稲穂こそ

俺達の血と汗と

高い肥料が凝ったのがか

この半分は町の地主へ納ねばならんのが

あの貧乏貯蓄頭が

血の滲み出るやうに苦ししい労働も

自らの早魃に野に臥して

笠敷蚊に食はれながら甚葉しべみたり存細い水も  
稲田に灌いだのも考へはしめえ

お、お月さん

おまへも好奇心がたつたら

温泉町の丘に遊んだ

別荘の窓をのぞいて見るといひ

あの親爺は年かひも存く

妾のぶよくしだ尻に

さつとつかまつておるから

あれ才たあの稲穂の蔭から

恙の乱曲がさこへて来る

村の青年達け

色くくろい娘と講交をやってゐるんが

アイツ等とても利巧なんが

ひしく百姓の胸に喰ひ込んで来る



経済難も階級的意識も  
まつたてくうあの空をんた

あ、肌が小さむく存つて来た  
お月さんさやうなら  
俺は帰つてのみのびん／＼蹴り上る  
其れを逆の上で獣のごとく寝よう  
明日の晩もまた  
このこみしし俺と逢つてくぬ

山村哀歌 (其の二)

はたらきこもより知らなりのやうな人あいの産さか  
七月に在りても陽がさま／＼かりし日照らな  
山峡の田で一生たんのまはたつておたか  
彼の田は秋風が吹いても実が入らぬ稲が青々としてみた  
それでも不味い、税金を急つたことがなかつた  
たりの肥料を入れて培つておたかだ  
山の木の葉が朽ち果てて  
冷々と吹く北風に舞ひあがる稗  
婦と二人で不草のやうな稲をせつせと刈つておた  
二百も三百も穫つて罷んで  
稲の穂を食ひ廻る雀らも  
庄の稲杭には能い下り月日



山村哀歌 (その二)

秋には珍らしく  
小春日和がながくつゞいて  
山畑の豆がからり／＼実ったとき  
おさまきは衛へうらわれて行った  
まづらしい生端のなかにを自つても温順レかったおさまき  
時雨する街の灯に  
惨めな生活をあらう／＼泣いておるだらう  
あゝ夕顔の花が白く咲いてた夕暮  
彼の女の野風呂の湯に浸って  
幼い頃の幻想にむせんだとき  
しのひ寄るやうに来て俺の脊中を流してくれたっけか  
そんなことは古く季の節のやうに存つてしまつた  
牝羊のやうな女 こうした温順な女達は  
農村をおそふたあるもののため  
犠牲羊となつてまがりあげられて行った

山村哀歌 (その三)

女らっこが工場ではたうへてけつからいソつて  
野風呂を借りに来るたんび  
おみねか、あのじまんのむすめ  
みちこは蒼蒼冷めて帰つて来た  
胸の病氣だんだんどうだ  
おみねか、あは  
村のだん存しうや、  
稻刈りに雇つてけろと言つてあつた  
おみちばと母日  
藁びんを下げて  
さう／＼医者へ通つた



場末の女

サカバノオンナタマコトイフノ  
ワタシダツテスキデフンナシヨウバイシテ耳ルノデナイワ  
ネ　ワタシハマヅシイレヤクンヤウノココヨ  
ホントニヒヤクシヤウクライイツマラナイモノハナイワネ　オホッホ……  
タカイコヤレノイレテアセミドロデトツタ  
オコメガ

一ツブモナクナツテヨ  
シロイオマンマノタベラレルノハオホントオシヨウガツバカリヨネ  
ハトホツポノヤウニアワヤマメバカリクツテクラサナケレバナラナイモノ  
ソレヨリハコノシヨウバイハヨツポドマシダワ  
ウチノオトウサンガコヤレヤカラサンバンヨカケラレテ

クビククリシテシンダノヨ

イモネ　マンダヲミテオモイダスワ  
ワタシニヒキキナヒトガアツタノヨ　コイシイヒトガ  
フンオフトイツタツテハシマラナイワ  
ワタシミンナワカツテ耳ルモノ  
ヨワイモノハナゼナカナケレバオナナイカ



開墾地

枯木とりに行くんだと言ふ事  
堀り廻した種を根っこに腰をおろし  
喜が燃やして入れた焚火で煙草をつけた

— 千子ジタイショウ開墾地植へるの桑の  
いなか、牧るにはいそ桑をやらなければならぬ  
百んぼお蚕さまが俺達を食わせねえようになつた  
むかしから養蚕して来たものを忘れられぬ  
でも俺たちはよっぽど考へねばならぬなつた  
踊加川ちやくて糸目が立って糸針の優良なつて  
製糸家が蚕種を指定するやうになつてから  
違蚕することが多くなつた  
違蚕してからうあ借金をどつさり背負ふた揚句

塩漬一片さえも食われぬえからな

美濃のことは俺たちは一ぼん知つておるんだ  
巡廻してくるあのおぢさまこちよひよりほ

俺たちはよっぽどわかつておるんだ

やっらは理屈ばかりだし俺らは實際に長らんども  
おんさまのことより会社でよこした煉炭を

どのくらい費つておるがたんをしておるのだ

あの養蚕教師つて言ひ奴な

た子にお茶な御馳走するものなり

ミンセイトウエのセイウカイのとうだの

滿洲がどうなつたの聯盟に於ける日本がこうだつて  
俺たちは尻からほいまくるやうに忙しくつても

アイツ養蚕のんき存ものだ

そのあげくおつこどこの娘の子ばおテレンとやらがしたと言

ふでねえか

— それほほんとかつてヤチジタイショウ

むっかしから火の気のなつとこから煙が立たなつたとへ  
俺らはほんのことより言わぬえや







吹雪の夜

子もものも重ねてやれぬ  
子供らのことか  
むっつりだまっつりしまっつり  
俺と妻  
外には吹雪が暴れ出てる  
俺はさびしくなり  
じつとくらゐ火鉢を見た  
妻は茶がた乳房も  
餓鬼にふくませ  
瘦れ切った親を泪でぬらし

おろ／＼声もたてずに  
泣きつづける

吹雪は獺猛に叫びつづける  
あゝあゝの火は冷たく消えてしまつたが  
燃え上る憤怒に  
くすぶる粗朶をたゞきつけ  
暗い壁に向つて立ち上る



吹雪 (その二)

板戸のすきから  
吹雪がびうびうふびうと  
おろりの火はくすぶる  
俺はこぼれてくる手をこたく〜ヤリながら  
寒い土間で俵を編んだ  
——タツちゃん見たま存ヌキ買ッてよ——と  
あるも存いも判らなリ 餓鬼奴に  
泣き面こいてソグまれ  
俺と妻は唇をわんだ  
俺達まづレい百姓には  
秋の中に米がなくなリ  
飢と寒とに震へる日が多かつた  
ソまにくるべえ

吹雪見たいにおそろしいけんまくで借金とりが  
肥料屋から酒屋から役場から  
その時の挨拶をこんたんしなから  
俺は寒い土間で俵を編んだ

吹雪 (その三)

いくら借りたもんでも  
ないものかへしたためしのなりことは  
むかしから男がねいくて  
餓鬼が生まれたためしのなりのと  
同じだったと言ったらよ  
あのキつこおやじいらくしやくにさわったか  
禿頭をホウく〜さして  
思知らず だつてー  
生意気 だつてー  
人非人 だつてー



横着 江戸一  
どうぼう 江戸一  
お隣三けんにいづくよ  
でつかの声でがらされても  
結局何いものはないだけのことだんべえ

吹雪 (その三)

うちの餓鬼奴にも  
うちの貧乏を判つて来た  
よその子供が  
赤い着物でいっ下駄はいて  
遊むのさそいに来ても  
火の気のない炬燵でおとなしく  
ぼろをつたっておる妻とまごともやうてゐて  
外へ出て遊ぼうともしない  
俵あんでた俺もさびしくなり

まごごと遊びの中に入つていけた

吹雪 (その四)

どろどろいのが悪いのか  
餓鬼奴は顔中の筋肉をひんまげて泣いた  
その切った泣き声に  
妻は乳房をりぶつかせても  
萎んだゴムのやうな乳房では  
泣き止みさうもない  
俺は妻から餓鬼奴を背負はせられ  
順水がたのい子守唄をうたひながら  
縄縲の下駄で外へ出て見た  
今まではお水廻つておた吹雪も  
すつかりお静まり  
月ばかりに明るく  
源三の家の上にはヤア〜と鳴つてゐた



分利マの証

その頃社も美しかったし  
由緒明かすかつたやうな気がする

どんなにやぶる日でも

各けみんは夢の上で柴を切つたもんだ

盗紙みたいな面してかせいだもんだ

暖かてきてそういじいと 思ふことがなかつた

現今こそ金持の所<sup>い</sup>有ばかりだが

お山はみんはオカシのもんだつた

管林署から山見廻りが来るし

誰でも早く見つけたものはオーイと叱鳴って合図したもんだ

するとみんは鉈や鋸をもつて山中へ行くもんだ

でもみつたるとかたりげさく人をとられたもんだが

みんはしてそれをおさめたから

そういじくはなかつたもんだ

二ん百こと言つても

おめいらはほんとしめいが

今の人よりは強かつたしみんは穢つたもんだ

柴の六七十も切つて菜飯で楽なもんだつた

そして晩より早、帰つて

帰りがかしくて水も濁酒を呑んで温つたもんだ

町へ行くにもみんは

柴も背負つて行ったもんだ

将西御代も魚代も

薪や此をやって決めたもんだ

だから現今みんは生糸をみかねでなかつたし

收れもしない内から

おめいらもお算はしなかつた



田や畑を耕すにも  
みんな共同してやったもんだ  
日本の人見たににずるくもなかつたも  
おしやべりもしなかつた  
ひとが困つてんのをよらこんでも居なかつた  
弱いものは弱いものは助けてやったものだ  
その頃社も羨しがつたし  
空も明かりのやうだつた

どこの家でも物は土相で挽いたもんだ  
電気も発動機も  
あんまり便利なものがないもどこにもなかつた  
薄暗いランプの下で此家彼家のへだてなく  
挽いて歩いたもんだ  
そしてな  
ランプを消すと唐箕の蔭や積蒿の上で  
ぼんぼ組をはしまったもんだ

まゆはどこでも糸にほぐして賣ったもんだ  
糸繰り女がどこの家にも  
四五人ぐらいやとほれて来ると  
毎夜若いもんが尻をかくして跳ね廻つた  
どぶ桶につっぱいたと言ふことも度々あつたもんだ  
存においても若いもののたのしみは  
お盆のをどりだつた  
兵を焦げる程焚火をたいて  
唄を唱つて夜つひてまどつたもんだ  
その頃よく突入つたたうきびは  
どこの畑でもふんだにあつた  
をどりに飽きて来るとたうきび畑に  
いっ女とわくれたもんだ  
むかしはみんなむきだしだつた



跋

言ひたれははばく言つたし  
うそも言はなかつた  
いま見ては弱きものいぢめられたくらしも  
そうなりつたしにやけても居なかつた  
葉や大根の糧飯を食みたに平気で食つておたもんだ  
ぼろを着ておてもんまくないもの食つても  
みんなのんびりしておたもんだ







詩集「野良篇」 領價 三十錢

昭和八年九月十日印刷  
昭和八年九月十日發行

著作者

山形縣南村山形市野村十九二一  
野村 吉 昭

印刷者

山形縣南村山形市野村十九二一  
野村 吉 昭

發行所

山形縣南村山形市野村十九二一  
野村 吉 昭



